

那珂遺跡第 185 次調査現地見学会資料

2021 年 7 月 31 日

福岡市埋蔵文化財課

福岡市埋蔵文化財課では、2021 年 4 月より博多区竹下 5 丁目にて那珂遺跡の発掘調査をおこなってきました。調査期間中は近隣および関係者の皆様よりご理解とご協力をいただきありがとうございました。調査終了にともない、調査成果の概要をご報告いたします。

1. 那珂遺跡について

那珂遺跡は、那珂川と御笠川に挟まれた丘陵の北部に位置しています。弥生時代には北側の比恵遺跡とあわせて福岡平野の中心地となり、「都市」のような場所とも言われます。古墳時代にはいったん衰退するものの、6 世紀には筑前地域で最大級の東光寺剣塚古墳が出現し、大型の建物がいくつも作られるなど再び重要な地域となってきます。今回の調査地点は那珂遺跡の中央部にあたります。



2. 調査成果

今回の調査では、7～8 世紀を中心として弥生時代から平安時代までの遺構（溝や柱穴）が見つかりました。さらに遺物の年代は縄文時代（約 1 万 5 千年前から約 2 千 700 年前）にまで遡り、非常に長い期間に渡ってこの場所が利用されたことが分かります。

現在の地表から 1 m ほど掘ると遺構が見つかり、周辺と比べて低くなるくぼんだ地形だったようです。なお、遺構の年代などは今後の検討で変わる可能性があります。



北側から撮影した調査区全景（左側が東側＝1 区、右側が西側＝2 区）

★縄文時代★

縄文時代の遺構は確認されていませんが、黒曜石製の石器などが出土しています。



黒曜石

安山岩

▷ 縄文時代の矢じり
下の凹みに矢柄を取り付けて
使います。
端部を入念に加工しています。
形状も石材も様々です。

弥生土器と一緒に緑色の玉が出土
しました。

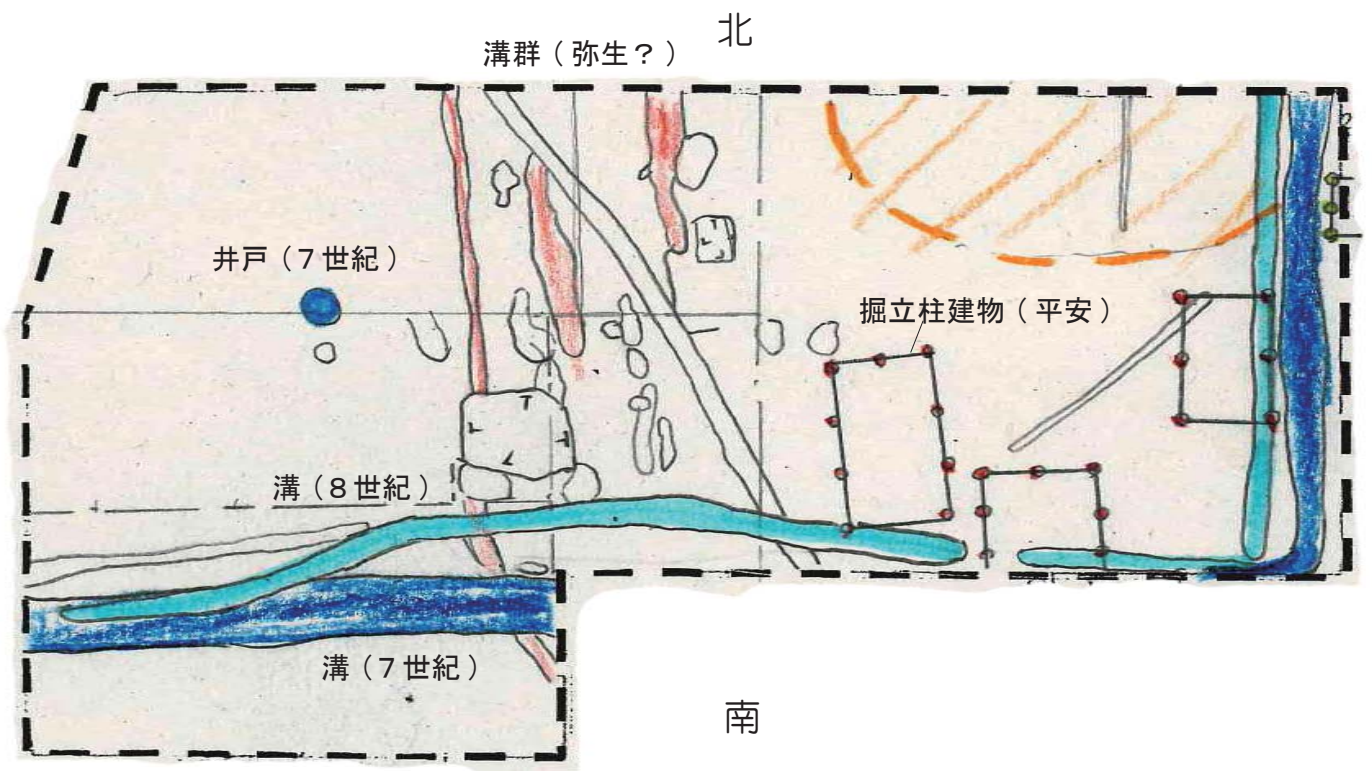
玉には紐通しの孔が開いています。
直径約2mmと非常に小さく、当時の
高い技術がうかがえます。



★弥生・古墳時代★

弥生時代の遺物や遺構は調査区北側で集中的に見つかりました。周辺での過去の調査成果を考えると、南側では、後世の削平で遺構は削られて消滅したのかもしれない。

遺構は、溝状の掘り込みが数本平行していることがわかりました。底面がでこぼこの掘り込みもありますが、どのような意味をもつのでしょうか。



★飛鳥時代★

飛鳥時代（7世紀）には大規模な溝が作られました。溝は幅約2mで、現代の道路とほぼ平行するように南北にまっすぐ走り、調査区の角で屈折して西へ伸びていました。底は幅40cmほどあり動物が踏み込んだかのような凹凸がみられます。出土遺物には須恵器（提瓶、平瓶）、瓦などがあります。溝は7世紀の終わりごろまでには埋没しています。同じ頃には井戸も掘られています。



掘り進めると・・・



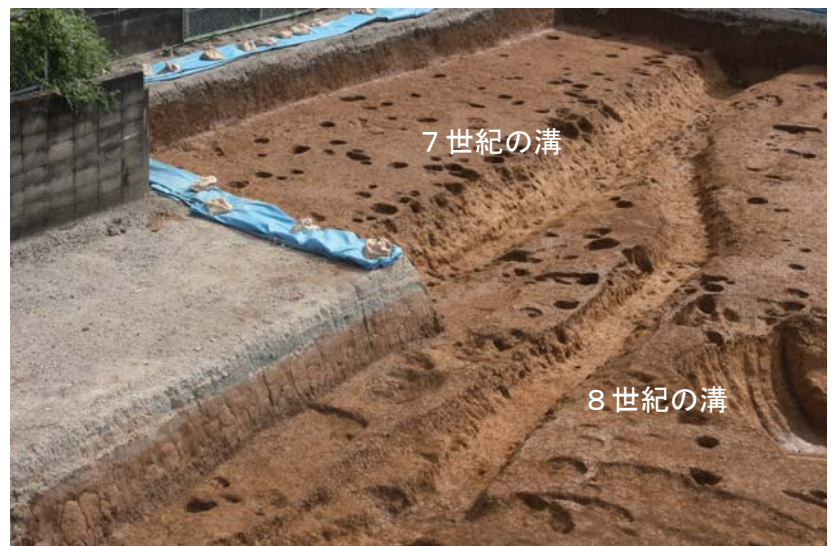
西に向かって直角に屈曲しています



南北にまっすぐに伸びる2本の溝を発見

★古代★

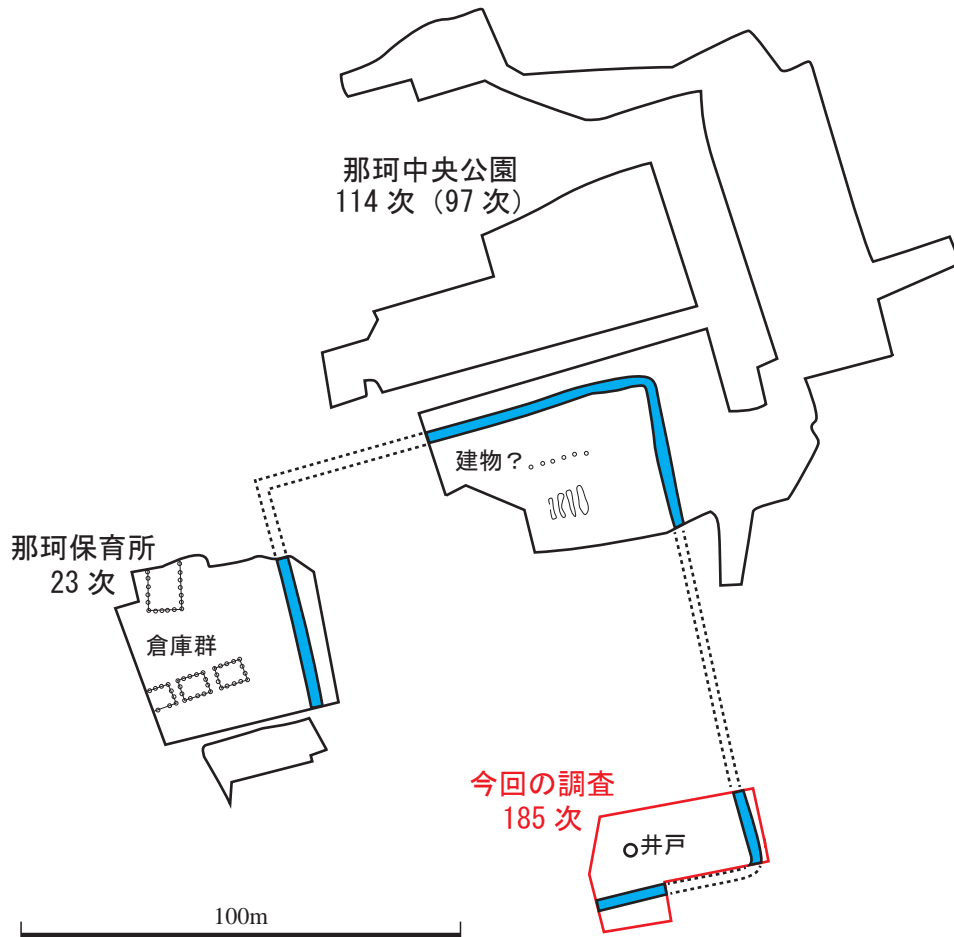
8世紀には埋没した7世紀の溝と平行するように浅い溝が掘削されます。大溝と同様に南端で屈曲していますが、右の写真のように一部は屈折していることがわかります。平安時代には何棟かの掘立柱建物が建っていました。



東西でも2本の溝が並走

3. 今回の調査成果と那珂遺跡

飛鳥時代の直線的な溝は、北側の那珂中央公園、西側の那珂保育所でも確認されています。時期や規模、配置から今回見つかった溝と関係する可能性があり、仮に一連の溝だとすれば東西約90m、南北約115mの広い範囲を区画することになります。これほど広大な区画は一般的な集落ではみられないことから、特殊な性格をもつ場所だったと言えるでしょう。那珂保育所では3棟の大型の倉庫跡が並んでおり、公的な性格をもった施設と推定されます。



『日本書紀』の536年の記事には、筑紫に「那津官家」が設置されたことが記されています。那津官家では諸国から穀物を集めて保管していました。緊急時に備えた食料の保管庫であり、また九州を拠点とした外交・軍事の窓口という役割をもったとの見方もあり、のちの大宰府や鴻臚館につながるものとも考えられています。

那津官家は那珂遺跡の北側の博多駅南5丁目（比恵遺跡）に所在したと考えられます。那珂遺跡は比恵遺跡に続いて倉庫や井戸が増加し、九州で初期の瓦を利用するなど、6世紀に栄えた比恵遺跡と同様に、7世紀のこの地域の中心的な場所として機能したことがうかがえます。

今回の調査では那珂遺跡の歴史的な重要性があらためて浮彫りになり、古代福岡の理解がより一層進むものと期待されます。



周辺の調査で出土した軒丸瓦